

〈序〉

『註釈版聖典』 831頁

ひそかに愚案を回らして、ほぼ古今を勘ふるに、先師（親鸞）の口伝の眞信に異なることを歎き、後学相統の疑惑あることを思ふに、幸ひに有縁の知識によらずは、いかでか易行の一門に入ることを得んや。まつたく自見の覚語をもつて、他力の宗旨を乱ることなかれ。よつて、故親鸞聖人の御物語の趣、耳の底に留むるところ、いささかこれに注す。ひとへに同心行者の不審を散ぜんがためなりと云々。

【現代語訳】

『現代語版聖典（歎異抄）』 3頁

わたしなりにつたない思いをめぐらして、親鸞聖人がおいでになったところと今とをくらべてみますと、このごろは、聖人から直接お聞きした眞実の信心とは異なることが説かれていて、歎かわしいことです。これでは、後のものが教えを受け継いでいくにあたり、さまざまな疑いや迷いがおきるのではないかと思われます。幸いにも縁あつて、まことの教えを示してくださる方に出会うことがなかつたなら、どうしてこの易行の道に入ることができるとしようか。決して、自分勝手な考えにとらわれて、本願他力の教えのかなめを思い誤ることがあつてはなりません。

そこで、今は亡き親鸞聖人がお聞かせくださったお言葉のうち、耳の底に残つて忘れられないものを、少しばかり書き記すことにします。これはただ、同じ念仏の道を歩まれる人々の疑問を取り除きたいからです。

〈第一条〉

〔註釈版聖典〕 831頁

一 弥陀の誓願不思議にたすけられまゐらせて、往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつころのおこるとき、すなはち撰取不捨の利益にあづけしめたまふなり。

弥陀の本願には、老少・善悪のひとをえらばれず、ただ信心を要とすとすべし。そのゆゑは、罪悪深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にまします。

しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず、念仏にまさるべき善なきゆゑに。悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきゆゑにと云々。

【現代語訳】

〔現代語版聖典〈歎異抄〉〕 4頁

阿弥陀仏の誓願の不思議なはたらきにお救いいただいて、必ず浄土に往生するのであると信じて、念仏を称えようという思いがおこるとき、ただちに阿弥陀仏は、その光明の中に撰め取って決して捨てないという利益をお与えくださるのです。

阿弥陀仏の本願は老いも若きも善人も悪人もわけへだてなさいません。ただ、その本願を聞きひらく信心がかなめであると心得なければなりません。なぜなら、深く重い罪を持ち、激しい煩惱をかかえて生きるものを救おうとしておこされた願いだからです。

ですから、本願を信じるものには、念仏以外のどんな善もいりません。念仏よりもすぐれた善はないからです。また、どんな悪も恐れることはありません。阿弥陀仏の本願をさまたげるほどの悪はないからです。

このように聖人は仰せになりました。

〈第二条〉

『註釈版聖典』832頁

一 おのおのの十餘箇国のさかひをこえて、身命をかへりみずして、たづねきたらしめたまふ御ころざし、ひとへに往生極樂のみちを問ひきかんがためなり。しかるに念仏よりほかに往生のみちをも存知し、また法文等をもしりたるらんと、ころろにくくおぼしめしておはしましてはんべらんは、おほきなるあまりなり。もししからば、南都北嶺にもゆゆしき学生たちおほく座せられて候ふなれば、かのひとにもあひたてまつりて、往生の要よくよくきかるべきなり。

親鸞におきては、ただ念仏して、弥陀にたすけられまあらすべしと、よきひと（法然）の仰せをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり。

念仏は、まことに浄土に生るるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもつて存

【現代語訳】

『現代語版聖典〈歎異抄〉』5頁

あなた方がはるばる十餘りもの国境をこえて、命がけでわたしを訪ねてこられたのは、ただひとえに極樂浄土に往生する道を問いただしたいという一心からです。けれども、このわたしが念仏の他に浄土に往生する道を知っているとか、またその教えが説かれたものなどを知っているだろうかお考えになつているのなら、それは大変な誤りです。そういうことであれば、奈良や比叡山にもすぐれた学僧たちがいくらでもおいでになりますから、その人たちにお会いになつて、浄土往生のかなめを詳しくお尋ねになるとよいのです。

この親鸞においては、「ただ念仏して、阿弥陀仏に救われ往生させていただくのである」という法然聖人のお言葉をいただき、それを信じているだけで、他に何かがあるわけではありません。

念仏は本当に浄土に生れる因なのか、逆に地獄に墮ちる行いなのか、まったくわたしの知るところではありません。たとえ法然聖人にだまされて、念仏したために地獄へ墮ちたとしても、決して後悔はいたしません。

知せざるなり。たとひ法然聖人にすかされまゐらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候ふ。

そのゆゑは、自余の行もはげみて仏に成るべかりける身が、念仏を申して地獄にもおちて候はばこそ、すかされたてまつりてといふ後悔も候はめ。いづれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし。

弥陀の本願まことにおはしませば、
積尊の説教虚言なるべからず。仏説まことにおはしませば、善導の御釈虚言したまふべからず。善導の御釈まことならば、法然の仰せそらごとならんや。法然の仰せまことならば、親鸞が申すむね、またもつてむなしかるべからず候ふか。

詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。このうへは、念仏をとりて信じたてまつらんと、またすてんと、面々の御はからひなりと云々。

なぜなら、他の行に励むことで仏になれたはずのわたしが、それをしないで念仏したために地獄へ堕ちたというのなら、だまされたという後悔もあるでしょうが、どのような行も満足に修めることのできないわたしには、どうしても地獄以外に住み家はないからです。

阿弥陀仏の本願が真実であるなら、それを説き示してください。積尊の教えがいつわりであるはずはありません。積尊の教えが真実であるなら、その本願念仏のころをあらわされた善導大師の解釈にいつわりのあるはずがありません。善導大師の解釈が真実であるなら、それによって念仏往生の道を明らかにしてください。法然聖人のお言葉がどうして嘘いつわりでありましょうか。法然聖人のお言葉が真実であるなら、この親鸞が申すこともまた無意味なことではないといえるのでしょうか。

つきつめていえば、愚かなわたしの信心はこの通りです。この上は、念仏して往生させていただく信じようとも、念仏を捨てようとも、それぞれの考えしだいです。

このように聖人は仰せになりました。

〈第三条〉

『註釈版聖典』 833頁

【現代語訳】

『現代語版聖典（歎異抄）』 8頁

一 善人なほもつて往生をとぐ。いはんや悪人をや。

しかるを世のひとつねにいはいはく、「悪人なほ往生す。いかにいはんや善人をや」。この条、一旦そのいはれあるに似たれども、本願他力の意趣にそむけり。そのゆゑは、自力作善のひとは、ひとへに他力をたのむこころかけたるあひだ、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力のこころをひるがへして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

よつて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はと、仰せ候ひき。

善人でさえ浄土に往生することができるのです。まして悪人はいうまでもありません。

ところが世間の人は普通、「悪人でさえ往生するのだから、まして善人はいうまでもない」といいます。これは一応もつともなようですが、本願他力の救いのおこころに反しています。なぜなら、自力で修めた善によつて往生しようとする人は、ひとすじに本願のはたらきを信じる心が欠けているから、阿弥陀の本願になつていないのです。しかしそのような人でも、自力にとられた心をあらためて、本願のはたらきにおまかせするならば、真実の浄土に往生することができます。

あらゆる煩惱を身にそなえているわたしどもは、どのような修行によつても迷いの世界をのがれることはできません。阿弥陀は、それをあわれに思われて本願をおこされたのであり、そのおこころはわたしどものような悪人を救いよつて仏にするためなのです。ですから、この本願のはたらきにおまかせする悪人こそ、まさに浄土に往生させていただく因を持つものなのです。

それで、善人でさえも往生するのだから、まして悪人はいうまでもないと、聖人は仰せになりました。

〈第四条〉

『註釈版聖典』834頁

【現代語訳】

『現代語版聖典〈歎異抄〉』9頁

一 慈悲に聖道・浄土のかはりめあり。

聖道の慈悲といふは、ものをあはれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもふがごとくたすけとぐること、きはめてありがたし。

浄土の慈悲といふは、念仏して、いそぎ仏に成りて、大慈大悲心をもつて、おもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。

今生に、いかにいとほし不便とおもふども、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏申すのみぞ、すゑとほりたる大慈悲心にて候ふべきと云々。

慈悲について、聖道門と浄土門とは違いがあります。

聖道門の慈悲とは、すべてのものをあわれみ、いとおしみ、はぐくむことです。しかし思いのままに救いとげるとは、きわめて難しいことです。

一方、浄土門の慈悲とは、念仏して速やかに仏となり、その大いなる慈悲の心で、思いのままにすべてのものを救うことをいうのです。

この世に生きている間は、どれほどかわいそうだ、気の毒だと思つても、思いのままに救うことはできないのだから、このような慈悲は完全なものではありません。ですから、ただ念仏することだけが本当に徹底した大いなる慈悲の心なのです。

このように聖人は仰せになりました。

〈第五条〉

『註釈版聖典』 834頁

【現代語訳】

『現代語版聖典（歎異抄）』 10頁

一 親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏申したること、いまだ候はず。

そのゆゑは、一切の有情はみなもつて世々生々の父母・兄弟なり。いづれもいづれも、この順次生に仏に成りてたすけ候ふべきなり。

わがちからにてはげむ善にても候はばこそ、念仏を回向して父母をもたすけ候はめ。

ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもつて、まづ有縁を度すべきなりと云々。

親鸞は亡き父母の追善供養のために念仏したことは、かつて一度もありません。

というのは、命のあるものはすべてみな、これまで何度となく生れ変わり死に変わりしてきた中で、父母であり兄弟・姉妹であったのです。この世の命を終え、浄土に往生してただちに仏となり、どの人をもみな救わなければならないのです。

念仏が自分の力で努める善でありますなら、その功德によって亡き父母を救いもしましょうが、念仏はそのようなものではありません。

自力にとらわれた心を捨て、速やかに浄土に往生してさとりを開いたなら、迷いの世界にさまざまな生を受け、どのような苦しみの中にあろうとも、自由自在で不可思議なはたらきにより、何よりもまず縁のある人々を救うことができるのです。

このように聖人は仰せになりました。

〈第六条〉

『註釈版聖典』835頁

一 専修念仏のともがらの、わが弟子、ひとの弟子といふ相論の候ふらんこと、もつてのほかの子細なり。

親鸞は弟子一人もたず候ふ。そのゆゑは、わがはからひにて、ひとに念仏を申させ候はばこそ、弟子にても候はめ。弥陀の御もよほしにあづかつて念仏申し候ふひとを、わが弟子と申すこと、きはめたる荒涼のことなり。

つくべき縁あればともなひ、はなるべき縁あればはなることのあるをも、師をそむきて、ひとにつれて念仏すれば、往生すべからざるものなりなどいふこと、不可説なり。如来よりたまはりたる信心を、わがものがほに、とりかへさんと申すにや。かへすがへすもあるべからざることなり。

自然のことわりにあひかなはば、仏恩をもしり、また師の恩をもしるべきなりと云々。

【現代語訳】

『現代語版聖典〈歎異抄〉』11頁

同じ念仏の道を歩む人々の中で、自分の弟子だ、他の人の弟子だというい争いがあるようですが、それはもつてのほかのことです。

この親鸞は、一人の弟子も持っていない。なぜなら、わたしのはからいで他の人に念仏させるのなら、その人はわたしの弟子ともいえるでしょうが、阿弥陀仏のはたらきにうながされて念仏する人を、わたしの弟子などというのは、まことに途方もないことだからです。

つくべき縁があれば一緒になり、離れるべき縁があれば離れていくものなのに、師に背き他の人にしたがつて念仏するものは往生できないなどというのは、とんでもないことです。如来からいただいた信心を、まるで自分が与えたものであるかのように、取り返そうとでもいうのでしょうか。そのようなことは、決してあつてはならないことです。

本願のはたらきにかなうなら、おのずから仏のご恩もわかり、また師の恩もわかるはずです。

このように聖人は仰せになりました。

〈第七条〉

『註釈版聖典』 836頁

一 念仏ねんぶつ者は無礙むゐの一道いちどうなり。そのいはれいかんとならば、信心しんしんの行者ぎやうじやには、天神てんじん・地祇じぎも敬伏きやうぶくし、魔界まかい・外道げどうも障礙しょうがいすることなし。罪惡ざいあくも業報ごうほうを感ずることあたはず、諸善しよぜんもおよぶことなきゆゑなりと云々うんぬん。

〈第八条〉

『註釈版聖典』 836頁

一 念仏ねんぶつは行者ぎやうじやのために、非行ひぎやう・非善ひぜんなり。わがはからひにて行ずるにあらざれば、非行ひぎやうといふ。わがはからひにつくる善ぜんにもあらざれば、非善ひぜんといふ。ひとへに他力たうりきにして、自力じりきをはなれたるゆゑに、行者ぎやうじやのためには、非行ひぎやう・非善ひぜんなりと云々うんぬん。

【現代語訳】

『現代語版聖典〈歎異抄〉』 13頁

念仏ねんぶつ者は、何ものにもさまたげられないただひとすじの道を歩むものです。それはなぜかというと、本願ほんがんを信じて念仏する人には、あらゆる神々が敬つてひれ伏し、悪魔も、よこしまな教えを信じるものも、その歩みをさまたげることとはなく、また、どのような罪惡ざいあくもその報いをもたらずことはできず、どのような善も本願の念仏には及ばないからです。このように聖人は仰せになりました。

【現代語訳】

『現代語版聖典〈歎異抄〉』 14頁

念仏ねんぶつは、それを称えるものにとつて、行でもなく善でもありません。念仏は、自分のはからひによつて行うのではないから、行ではないということです。また、自分のはからひによつて努める善ではないから、善ではないということです。念仏は、ただ阿彌陀仏の本願ほんがんのはたらきなのであつて、自力じりきを離れているから、それを称えるものにとつては、行でもなく善でもないので。このように聖人は仰せになりました。

〈第九条〉

『註釈版聖典』 836頁

【現代語訳】

『現代語版聖典（歎異抄）』 14頁

一 念仏申し候へども、踊躍歡喜のころおろそかに候ふこと、またいそぎ浄土へまゐりたきころの候はぬは、いかにと候ふべきことにて候ふやらんと、申しいで候ひしかば、親鸞もこの不審ありつるに、唯円房おなじころにてありけり。よくよく案じみれば、天にをどり地にをどるほどによるこぶべきことをよるこばぬにて、いよいよ往生は一定とおもひたまふなり。よろこぶべきころをおさへてよろこばざるは、煩惱の所為なり。しかるに仏かねてしらしめして、煩惱具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごとし、われらがためなりけりとしられて、いよいよたのもしくおぼゆるなり。

また浄土へいそぎまゐりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところぼそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。久遠劫より

念仏しておりまして、おどりがるような喜びの心がそれほど湧いてきませんし、また少しでもはやく浄土に往生したいという心もおこつてこないのは、どのように考えたらよいのでしょうかとお尋ねしたところ、次のように仰せになりました。

この親鸞もなぜだろうかと思つていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりがるほど大喜びするはずのことが喜べないから、ますます往生は間違いないと思うのです。喜ぶはずの心が抑えられて喜べないのは、煩惱のしわざなのです。そうしたわたしどもであることを、阿弥陀仏はじめから知つておられて、あらゆる煩惱を身にそなえた凡夫であると仰せになつています。ですから、本願はこのようになわたしどものために、大いなる慈悲の心でおこされたのだなあと思ふかされ、ますますたのもしく思われるのです。

また、浄土にはやく往生したいという心がおこらず、少しでも病氣にかかると、死ぬのではないだろうかと心細く思われるのも、煩惱のしわざです。果てしなく遠い昔からこれまで生れ変わり死に変わりし続けてきた、苦惱に満ちたこの迷いの世界は捨てがたく、まだ生れたことのない安らかなさとの世

いままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからず候ふこと、まことによくよく煩惱の興盛に候ふにこそ。なごりをしくおもへども、娑婆の縁尽きて、ちからなくしてをはるときに、かの土へはまゐるべきなり。いそぎまゐりたきころなきものを、ことにははれみたまふなり。これにつけてこそ、いよいよ大悲大願はたのもしく、往生は決定と存じ候へ。踊躍歡喜のころもあり、いそぎ浄土へもまゐりたく候はんには、煩惱のなきやらんと、あやしく候ひなましと云々。

界に心ひかれないのは、まことに煩惱が盛んだからなのです。どれほど名残惜しいと思つても、この世の縁が尽き、どうすることもできないで命を終るとき、浄土に往生させていただくのです。はやく往生したいという心のないわたしのようなものを、阿弥陀仏はことのほかあわれに思つてくださるのです。このようなわけであるからこそ、大いなる慈悲の心でおこされた本願はますますたのもしく、往生は間違いないと思ひます。

おどりががるような喜びの心が湧きおこり、また少しでもはやく浄土に往生したいというのでしたら、煩惱がないのだろうか、きっと疑わしく思われることでしょう。

このように聖人は仰せになりました。

〈第十條〉

『註釈版聖典』 837頁

一 念仏には無義をもつて義とす。不可
稱不可説不可思議のゆゑにと仰せ候ひ
き。

そもそも、かの御在生のむかし、お
なじくこころざしをして、あゆみを遼遠
の洛陽にはげまし、信をひとつにして、
心を当来の報土にかけしともがらは、
同時に御意趣をうけたまはりしかども、
そのひとびとにもなひて念仏申さるる
老若、そのかずをしらずおはしますな
かに、上人(親鸞)の仰せにあらざる異義
どもを、近來はおほく仰せられあうて候
ふよし、伝へうけたまはる。いはれなき
条々の子細のこと。

【現代語訳】

『現代語版聖典(歎異抄)』 17頁

本願他力の念仏においては、自力のはからいがまじらないことを根本の法義
とします。なぜなら、念仏ははからいを超えており、たたえ尽すことも、説
き尽すことも、心で思いはかることもできないからですと、聖人は仰せにな
りました。

思えばかつて、親鸞聖人がおいでになったころ、同じ志をもってはるかに
遠い京の都まで足を運び、同じ信心をもつてやがて往生する浄土に思いを
よせた人々は、ともに親鸞聖人のおこころを聞かせていただきました。けれ
ども、その人々にしたがって念仏しておられる方々が、老いも若きも数え切
れないほどたくさんおいでになる中で、近ごろは、聖人が仰せになった教え
とは異なることをさまざまにいいあっておられるということ、人づてに聞
いています。それら正しくない考えの一つ一つについて、以下に詳しく述べ
ていきたいと思います。

〈後序〉

『註釈版聖典』 851頁

右条々は、みなもつて信心の異なるよりことおこり候ふか。故聖人（親鸞）の御物語に、法然聖人の御時、御弟子そのかずおはしけるなかに、おなじく御信心のひともすくなくおはしけるにこそ、親鸞、御同朋の御中にして御相論のこと候ひけり。

そのゆゑは、「善信（親鸞）が信心も、聖人（法然）の御信心も一つなり」と仰せの候ひければ、勢観房・念仏房など申す御同朋達、もつてのほかにあらそひたまひて、「いかでか聖人の御信心に善信房の信心、一つにはあるべきぞ」と候ひければ、「聖人の御智慧・才覚ひろくおはしますに、一つならんと申さばこそひがことならぬ。往生の信心において、まつたく異なることなし、ただ一つなり」と御返答ありけれども、なほ「いかでかその義あらん」といふ疑難ありければ、詮ずるところ、聖人の御まへに

【現代語訳】

『現代語版聖典（歎異抄）』 45頁

これまで述べてきた誤った考えは、どれもみな真実の信心と異なっていることから生じたものかと思われます。今は亡き親鸞聖人からこのようなお話をうかがったことがあります。法然聖人がおいでになったころ、そのお弟子は大勢おいでになりましたが、法然聖人と同じく真実の信心をいただかれています方は少ししかおられなかったのでしょうか。あるとき、親鸞聖人と同門のお弟子がたとの間で、信心をめぐる論じあわれたことがありました。

といいますのは、親鸞聖人が、「この善信の信心も、法然聖人のご信心も同じである」と仰せになりましたところ、勢観房、念仏房などの同門の方々が、意外なほどに反対なさって、「どうして法然聖人のご信心と善信房の信心とが同じであるはずがあるのか」といわれたのです。そこで、「法然聖人は智慧も学識も広くすぐれておられるから、それについてわたしが同じであると申すのなら、たしかに間違いであろう。しかし、浄土に往生させていただく信心については、少しも異なることはない。まったく同じである」とお答えになったのですが、それでもやはり、「どうしてそのようなわけがあるのか」と納得せずに非難されますので、結局、法然聖人に直接お聞きして、どちらの主張が正しいかを決めようということになりました。

て自他の是非を定むべきにて、この子細を申しあげれば、法然聖人の仰せには、「源空が信心も、如来よりたまはりたる信心なり。善信房の信心も、如来よりたまはらせたまひたる信心なり。さればただ一つなり。別の信心にておはしまさんひとは、源空がまゐらんずる浄土へは、よもまゐらせたまひ候はじ」と仰せ候ひしかば、当時の一向専修のひととのなかにも、親鸞の御信心に一つならぬ御ことも候ふらんとおぼえ候ふ。

いづれもいづれも繰り言にて候へども、書きつけ候ふなり。露命わづかに枯草の身にかかりて候ふほどにこそ、あひともなはしめたまふひとびと〔の〕御不審をもうけたまはり、聖人（親鸞）の仰せの候ひし趣をも申しきかせまゐらせ候へども、閉眼ののちは、さこそしどけなきことどもにて候はんずらめと、歎き存じ候ひて、かくのごとくの義ども、仰せられあひ候ふひとびとにも、いひまよはされなんどせらるることの候はんときは、故聖人（親鸞）の御

そこで法然聖人に、詳しい事情をお話ししたところ、「この源空の信心も如来からいただいた信心です。善信房の信心も如来よりいただいたかかれた信心です。だからまったく同じ信心なのです。別の信心をいただいておられる人は、この源空が往生する浄土には、まさか往生なさることはありませんまい」と法然聖人が仰せになったというのであります。

ですから今でも、同じ念仏の道を歩む人々の間で、親鸞聖人のご信心と異なっておりますこともあるのだらうと思われます。

どれもみな同じことの繰り返しではありますが、ここに書きつけておきました。枯れ草のように老い衰えたこの身に、露のようにはかない命がまだわずかに残っているうちは、念仏の道を歩まれる人々の疑問もうかがい、親鸞聖人が仰せになった教えのこともお話ししてお聞かせいたしますが、わたしが命を終えた後は、さぞかし多くの誤った考えが入り乱れることになるのではないかと、今から歎かわしく思われてなりません。ここに述べたような誤った考えをいいあつておられる人々の言葉に惑わされそうになったときには、今は亡き親鸞聖人がそのおこころにかなって用いておられたお聖教をよくよくご覧になるのがよいでしょう。聖教というものには、真実の教えと方便の教えとがまざりあっているのです。方便の教えは捨てて用いず、真実の教えをいただくこそが、親鸞聖人のおこころなのです。くれぐれも注意して、決して聖教を読み誤ることがあってはなりません。そこで、大切な証拠

こころにあひかなひて御もちる候ふ御聖教どもを、よくよく御覽候ふべし。おほよそ聖教には、真実・権仮ともにあひまじはり候ふなり。権をすてて実をとり、仮をさしおきて真をもちるこそ、聖人（親鸞）の御本意にて候へ。かまへてかまへて、聖教をみ、みだらせたまふまじく候ふ。大切の証文ども、少々ぬきいでまゐらせ候うて、目やすにして、この書に添へまゐらせて候ふなり。

聖人（親鸞）のつねの仰せには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり。さればそれほどの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」と御述懐候ひしことを、いままた案ずるに、善導の「自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねにしづみつねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義四五七）といふ金言に、すこしもたがはせおはしませず。さればかたじけなく、

の文となる親鸞聖人のお言葉を、少しではありますが抜き出して、箇条書きにしてこの書に添えさせていただいたのです。

親鸞聖人がつねづね仰せになつていたことですが、「阿弥陀仏が五劫もの長い間思いをめぐらしてたてられた本願をよくよく考えてみると、それはただ、この親鸞一人をお救いくださいるためであつた。思えば、このわたしはそれほどに重い罪を背負う身であつたのに、救おうと思ひ立つてくださった阿弥陀仏の本願の、何ともつたないことであるうか」と、しみじみとお話しなつておられました。そのことを今またあらためて考えてみますと、善導大師の、「自分は現に、深く重い罪悪をかかえて迷いの世界にさまよい続けている凡夫であり、果てしない過去の世から今に至るまで、いつもこの迷いの世界に沈み、つねに生れ変わり死に変わりし続けてきたのであつて、そこから脱け出る縁などない身であると知れ」という尊いお言葉と、少しも違つてはおりません。そうしてみると、もつたないことに、親鸞聖人がご自身のこととしてお話しになつたのは、わたしどもが、自分の罪悪がどれほど深く重いもの

わが御身にひきかけて、われらが身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずして迷へるを、おもひしらせんがために候ひけり。

まことに如来の御恩といふことをば沙汰なくして、われもひともし、よしあしといふことをのみ申しあへり。聖人の仰せには、「善悪のふたつ、総じてもつて存知せざるなり。そのゆゑは、如来の御ところに善しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、善きをしりたるにてもあらめ、如来の悪しとおぼしめすほどにしりとほしたらばこそ、悪しさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろづのこと、みなもつてそらごとたはごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておはします」とこそ仰せは候ひしか。まことに、われもひともしらごとをのみ申しあひ候ふなかに、ひとついたまじきことの候ふなり。そのゆゑは、念仏申すについて、信心の趣をもたがひに問答し、ひとにもいひきかすとき、ひと

かも知らず、如来のご恩がどれほど高く尊いものかも知らずに、迷いの世界に沈んでいるのを気づかせるためであつたのです。

本当にわたしどもは、如来のご恩がどれほど尊いかを問うこともなく、いつもお互いに善いか悪いか、そればかりをいいあつております。親鸞聖人は、「何が善であり何が悪であるのか、そのどちらもわたしはまったく知らない。なぜなら、如来がそのおこころで善とお思ひになるほどに善を知り尽したのであれば、善を知つたといえるであらうし、また如来が悪とお思ひになるほどに悪を知り尽したのであれば、悪を知つたといえるからである。しかしながら、わたしどもはあらゆる煩惱をそなえた凡夫であり、この世は燃えさかる家のようにたちまちに移り変わる世界であつて、すべてはむなしくいつわりで、真実といえるものは何一つない。その中であつて、ただ念仏だけが真実なのである」と仰せになりました。本当に、わたしも他の人もみなむなしいことばかりをいいあつておりますが、とりわけ心の痛むことが一つあります。それは、念仏することについて、お互いに信心のあり方を論じあい、また他の人に説き聞かせるとき、相手にものをいわせず、議論をやめさせるために、親鸞聖人がまったく仰せになつていないことまで聖人の仰せであるといひ張ることです。まことに情なく、やりきれない思ひです。これまで述べてきたことを十分にわきまえ、心得ていただきたいと思ひます。

の口をふさぎ、相論をたたんがために、
まったく仰せにてなきことをも仰せとの
み申すこと、あさましく歎き存じ候ふ
なり。このむねをよくよくおもひとき、
こころえらるべきことに候ふ。

これさらにわたくしのことばにあらざ
といへども、経釈の往く路もしらず、
法文の浅深をこころえわけたることも
候はねば、さだめてをかしきことにて
こそ候はめども、古親鸞の仰せごと候
ひし趣、百分が一つ、かたはしばか
りをもおもひいでまゐらせて、書きつけ
候ふなり。かなしきかなや、さいはひ
に念仏しながら、直に報土に生れずして、
辺地に宿をとらんこと。一室の行者の
なかに、信心異なることなからんために、
なくなく筆を染めてこれをしるす。なづ
けて「歎異抄」といふべし。外見ある
べからず。

これらは決してわたし一人の勝手な言葉ではありませんが、
たの書かれたものに説かれた道理も知らず、仏の教えの深い意味を十分に心
得ているわけでもありませんから、きつとおかしなものになつて
しよう。けれども、今は亡き親鸞聖人が仰せになつておられたこと
の百分の一ほど、ほんのわずかばかりを思い出して、ここに書き記
したのです。幸いにも念仏する身となりながら、ただちに真実の
浄土へとどまるのは、何と悲しいことでしょう。同じ念仏の行者
の中で、信心の異なることがないように、涙にくれながら筆をとり、
これを書いたのです。「歎異抄」と名づけておきます。同じ教えを
受けた人以外には見せないでください。